札幌西支部 岡崎 正毅 Masaki Okazaki

全国会には広報委員会がない

平成26年5月、『かいほう』が創刊200号を迎え、特集を組んだ。

記念の企画として「歴代広報委員長による座談会」を掲載した。西本裕会員、小中圭三会員、金坂和正会員、薄井タカ子会員、岩本敏美会員、私・岡崎の他、上原貢会員と谷幹夫会員にもご出席いただき、広報委員会の“過去・現在・未来”を忌憚（きたん）なく語り合った。

今、読み返しても、とても良い内容だ。昨春、発刊となった北海道会『創立50周年記念誌』では、各委員会の歴代委員長座談会を掲載しているが、実は広報委員会の座談会はない。それだけに、この座談会記事の転載を提案すれば良かったと思う。失念していた。残念だ。

この座談会で、広報委員会が一時期（平成9年～12年）消滅していたことを知った。全国会の方針で、広報委員会を総務委員会に吸収・統合したのだ。だから今でも、全国役員大会においても広報委員会の部会は開催されていない。総務委員会にオブザーバーとして参加するのみである。

しかし、20の地域会では、どこでも会報等の何らかの発行物があり、北海道会を含めて幾つかの地域会では、広報委員会が復活している。そこで、平成20年に仙台市で全国役員大会が開催された時、東北会の広報委員長が、全国各地の広報委員長に呼びかけ、非公式ながらの会合を開いたことがある。会場がないので、1階ロビー隅で椅子を並べて、顔合わせ（自己紹介）とそれぞれの状況（情報交換）を語り合った。

この会合で、名刺を交換した千葉会が、翌年（だったかな？）札幌を訪れ交流会を行った。北海道会でも、福岡で九州会と交流の機会を持ち、この時は校正作業を手伝った。

5期10年で委員長を退く

ということで、全国会的には、広報委員会は総務委員会に所属する1つの部会みたいな存在なので、総務委員長や副会長を務めていた四ツ谷泰博会員とは、しばしば打合せや協議を重ねた。広報委員会の予算増額にも理解と同調を示してくれて、とてもありがたかった。四ツ谷会員が編集会議や校正作業に加わることはなかったが、懇親会には時折参加され、そのまま若い衆を引き連れて二次会へと繰り出していた。

当時、四ツ谷会員の札幌の自宅マンションには、当方の関与先社長も住んでいて訪問することがあった。ある時、1階エレベーターホールで、四ツ谷会員に偶然出会い、ご自宅に招かれたことがある。たまたま話題がZARD（坂井泉水）となり、以後、ZARDのポスターとCDジャケットに溢れた四ツ谷会員の事務所へ立寄ることもあった。

『かいほう』が創刊200号を迎え、一応の区切りがつき、編集・発行のノウハウも委員会として定着してきたので、委員長の交代を申し出た。四ツ谷会員から「委員長を辞めても広報委員会に残るということで、後任の人事は任せて」となり、山谷謙太会員が指名された。これで、平成27年6月、委員長を5期10年で退くことができた。

地域会ホームページにアクセスを

私が委員長時代の『かいほう』の表紙は、秋季大学の特集号以外は、「支部物語」の連載以来から北海道らしい風景写真やイベント写真を基本としていた。しかし山谷会員は、会員の顔写真

や集合写真に変えた。表紙からヒューマンインスタントがより強調されたと思う。この趣向は、今も引き継がれている。

また、4コマ漫画やSCGセンターのTKC社員らにインタビューする「委員長の取調室」、スープカレーのお店紹介など、次々と新企画を打ち出し、さらに印刷所を変え、紙質や紙面デザインもポップな感じとなり、『かいほう』への親しさが増したのではなかろうか。

山谷会員と宮下直樹会員が、それぞれ1期2年委員長を務めた後、令和元年から坂本文彦会員が委員長を務めている。

広報委員会の活動の大半は、『かいほう』の編集・発行であるが、実はもう一つ、TKC地域会のホームページの管理・更新という取り組みもある。私が委員長を辞める頃に、全国会で「TKCグループ」のホームページの中に各地域会のコンテンツが設置された。多分あまり周知されていないと思う。

令和になると、全国会事務局が、この地域会ホームページのレビュー数を報告するようになり、なんとなく競わされている感じだ。編集会議で、坂本委員長が「どの記事をホームページに載せましょうか」と問いかけている。

北海道会のホームページには、『かいほう』のバックナンバーや、「会員訪問」と「eひと・eはなし」も別枠で掲載しているので、時折、アクセスしてください。ちなみに『かいほう』の表紙にQRコードを掲載しております。

時の経過は恐ろしく残酷だ

一昨年（令和4年・2022年）、北海道会は創立50周年を迎えた。

令和4年9月8日、ロイトン札幌で記念式典を開催したことは記憶に新しい。そして、この式典内容も掲載した『創立50周年記念誌』が、昨春、発行された。『30周年記念誌』と同様、広報委員会のメンバーが中心となって制作している。

記念講演や各委員会の歴代委員長座談会などのテープ起しは外注であるが、原稿のまとめと校正作業は制作メンバーが行う。年末から確定申告の繁忙期前に、度々事務局会議室に集合し、手分けをしながらマニアックな校正作業に没頭した。限られた時間での作業だったので、少々手落ちがあるかもしれない。それでも、こうして1冊の本になった記念誌を手にすると、うれしい。ちょっとした充実感を味わう。

『30周年』の時は、企画の検討や年表等の原稿書きから携わっていたが、この『50周年』は、実質的にはほぼ校正作業のみである。なのに『30周年』と同様、編集後記の上部に掲載している制作メンバーの一人として集合写真に納まっている。ありがたい。けど、2つの写真を見比べると、私自身の変わりように驚く。嗚呼、時の経過は恐ろしい。あまりにも残酷だ。

TKC入会から四半世紀弱。入会とほぼ同時に、ずーっと広報委員会に関わってきた。委員会活動を通じて、志高く情熱あふれる魅力的な諸先輩や会員の方々、関係各位に出会えたことが、何ものにも代え難い、私の財産だ。ありがとうございます。

本間貴久新会長から「今期から広報委員会の顧問を引き受けください」と告げられ、TKCの場合「YES」しかないので承諾。人口統計の区分では、もう「現役世代」ではなく「前期高齢者」に該当するらしいが、これからも認知機能と身体機能の低下に抗いながら、お役目を果たしたいと思う。私の「広報委員会物語」は、まだまだ続く。